

「得られぬ希望を忘れない」

聖書に登場する数多くの人物の中で、一番、誰が印象深く、健気で、共感できるか、と問われると、私は、モーゼさん一択です。もちろん、聖書における絶対的の主人公は神様であり、イエス様であり、聖霊であることに異論はありませんが、だとしても、モーゼさんは非常に魅力的で、涙ぐましい活躍をした名脇役です。私たちが人生において味わうであろう多くの苦難を、モーゼさんは象徴的にとか、神秘的にとかではなくて、身をもって実際に味わい尽くした人でありました。私は、モーゼさんという人を、ストレスから逃れられない中間管理職の永遠の大先輩だと思っています。彼は、神様から与えられた運命を、嫌がりながらも、文句を言いながらも、でも、一生懸命に務め上げようと尽力しました。その運命に相応しい実力が無いことを自覚しつつ、そして、実際にその実力が大いに欠けていることを突き付けられながら、モーゼさんは与えられた運命と使命に、つまり、この召された命である召命に忠実であろうと尽くしてきました。

この召命というものは、自分で選ぶものではありません。たとえば牧師を志望する際には、召命感なるものが問われることが多いですが、モーゼさんの事例に学ぶなら、牧師なんて、なりたくてなるものじゃないんだと思わされます。神様によって、牧師にならされる、ならざるを得ない、という個人的な経験が、召命感というものなんじゃないかと私は思います。この点については、カトリックの神父である晴佐久先生という方が、言い得て妙な表現をされました。「世の多くの就職という場面では、自分がいかにその職業に適性があり、自分こそが相応しいということを主張するけれども、自分が神父になった経緯を振り返るなら、それは“消去法の召命”であった」と。消去法の召命とは、つまり、「あれもできる、これもできる、けれども、その中でも私はこれになりたいか

ら、ここに出願しました」という多くの選択肢がある中での主体的な選択、ではなくて「あれも無理、これもできない、私にはここしかないんだ」という非常に消極的な理由によって自分の意思とは関係なく追い詰められた状態へと、神様に導かれるということです。なので、晴佐久神父の抱いた召命感というのは、とても格好悪いんですよ。「本当はここに来たいわけじゃないんだけど、でも、ここしかない」という自分の不器用さと弱さを自覚して受け入れた先に抱く他ない召命感ということです。しかし、だからこそその根性もありますよね。だって、神父としてしか、牧師としてしか生きられない、と思うなら、もう、そこに殉じるしかないわけです。まあ、世の就活スキルとは、おおよそ真反対な考え方ですが、どこまでも潰しが利かないから、「仕方ない、神様、よろしくお願いします」という、そんな形の召命感だということです。もしかしたら、洗礼というものを、そうした側面があるかも知れませんね。別に洗礼を受けたいわけじゃないけど、なんだかそこに導かれてきた、そういう選択肢しか見えなくされてしまった。神様の御心って、そんな感じで働くものなんじゃないでしょうか。

モーセさんの召命感も、ある意味で、諦めの境地で、観念した先に芽生えたのでしょうか。神様によって、あらゆる退路が断たれた中で、アロンと言う兄弟が示されて、しぶしぶ、「じゃあ、もういいです、やります」という、消極的な決断だったと、私は思います。しかし、その弱さ、不適合さ、不器用さ、頼りなさに、神様の御力が宿ったのです。

モーセさんの人生は、「その後、神様の恵みを受けて、力強く、信頼に足る、優秀な指導者になって民を率いた」というハッピーエンドにはなりません。先ほども言いましたように、モーセさんはストレスの絶えない中間管理職です。イスラエルの民の不満を受け止め、神様にお伺いを立て、神様から命令を受け取り、イスラエルの民に伝達するという。しかも、その両者の言葉を取り次ぐたびに、叱られ、不平を言われ、もうどうすりゃいいんだ、という感じです。そんな人生を、

モーセさんは過ごしたのです。

すると、私たちは単純に思います。「そんな苦勞をした人なら、最後、神様が十分に報いてくださるだろう」と。しかし、どうでしょう、今日の御言葉は。「わたしは、そのとき主に祈り求めた。

「わが主なる神よ、あなたは僕であるわたしにあなたの大きいなること、力強い働きを示し始められました。あなたのように力ある業をなしうる神が、この天と地のどこにありましようか。どうか、わたしにも渡って行かせ、ヨルダン川の向こうの良い土地、美しい山、またレバノン山を見せてください。」しかし主は、あなたたちのゆえにわたしに向かって憤り、祈りを聞こうとされなかった」。

これは、正直、受け入れたくない結末です、少なくとも私にとっては。モーセさんは、「どうか、この出エジプトの目的地、この長い旅のゴールに導いてください」と神様に祈りますが、神様は、

「憤り、祈りを聞こうとされなかった」というのです。「そこは、ちょっと融通してくださいよ、神様」と思います。けれど、神様には、神様のお考えがあり、御計画があり、時があるということです。その確固たる御心は、いかに稀代の指導者であり、また苦勞人であったモーセさんに対しても全く忖度なく、揺らぐことはない。それこそ神様の摂理だったということです。優しい方であると信じたい神様にも、そういう強硬で非情な一面がある、ということは、子どもではない、大人の信仰者である私たちは弁えていたいと思います。

しかし、まだまだ私たちは、ずっと幸せな方です。古代ユダヤ教から続く、主なる神様を信じるキリスト教の私たちは、随分と恵まれています。だって、たった3週間か4週間ほど待てば、クリスマスをお祝いすることができるからです。むしろ、「クリスマスの準備に、アドベントの期間は短いよ」なんて思うことさえあります。しかし、この待降節が、主を待ち望む期間が、大昔の信仰者に比べて、どれだけ優遇されて、恵まれたものか。私たちは想像力を持って受け止めるべきでしょう。旧約聖書のイザヤ書やミカ書という預言者の書に、御子であり救世主である方の御降誕が預

言われてから、本当にその方の御降誕が実現するまでに、およそ 800 年の期間がありました。800 年です。2023 年を起点とした日本の年表に当てはめるなら、800 年前と言えば、鎌倉時代です。鎌倉時代から、今に至るまで、神様の御子が生まれることを待ち望み続ける信仰があった、という。

聖書を読むだけの私たちに、この 800 年は、ただの数字に過ぎません。「えらい長いこと待ち続けたんだろうな」という感想に至る、ただの記号に過ぎません。けれど、この 800 年という期間は、人に許された寿命を遥かに超えるものです。つまり、私たちは「インマヌエル預言」といって旧約聖書が伝えるクリスマスの先取りを、とてもお手軽な感じで、アドベントの第 1 週か、第 2 週に触れるわけですが、この「預言」を、心の底から信じつつ、心の底から待ち望みつつ、しかし、800 年という年月の中で寿命を迎えて、御子誕生の報せを聞くことなく、この地上を去った人々が五万といたということです。救い主が生まれるという預言だけを聞かされて、しかし、その実現の喜びを味わうことができなかつた人が、たくさんいたのです。そんな風に考えてみますと、800 年という期間には、きっと多くの「無念」があったことでしょう。一生懸命に神様に祈っても、尽くしても、誠実に生きても、善行を重ねても・・・、約束の地に辿り着けなかつたモーセさんのような人が、私たちの信仰の歴史の中には、たくさんいたんですね。どうしたって「最初のクリスマス」という喜びに辿り着けなかつた人がいたのです。

だから、私たちは、「インマヌエル預言」というものを、決して軽く扱うことはできません。これは、800 年の間、御子に出会えなかつたという絶望と、御子ご降誕の報せを聞くことができなかつた無念とを乗り越えて、なお、語り続けられてきた素晴らしく強固な「預言」であり、また、どんな不条理にも、どんな試練にも負けなかつた神様への揺るぎない「確信」なのです。この「預言」、この「確信」に、どれだけの信仰の積み重ねがあり、聖書への信頼があり、人間という矮小な存在を超えた神様への希望があったかを、私たちは心に留めたいと思います。

私たちの信仰は、残念ながら、現世利益的ではありません。生きている間に必ず報われるというものではありません。私たちの信仰は、私という存在を超えて、次の世代へと、次の時代へと受け継がれて、その連綿と続く歴史の中で、約束の地に辿り着いたり、御子の御降誕に接したりするものです。もちろん、一人ひとりを愛してくださる神様の愛は信じる足るものであると私は思います。神様は、過去ではなく、未来ではなく、現在の私たちをしっかりと捉えて、愛してくださると私は信じています。けれど、そう思うと同時に、神様の愛は、私たちの生きる現在だけに向けられているわけではない、ということも私は信じています。たとえ、今が不幸でも、現実が戦争でも、現在が不条理に満たされていたとしても、それらが、私たちにとって神様の愛を疑う理由にはなりません。希望を失う理由にはなりません。切実な祈りが拒否されたモーセさんの生涯を通して、800年も救世主の誕生を待って報われなかった人々の人生を通して、神様の御計画の壮大さ、深遠さを感じることができます。もしも、皆様の心の中に、未だに得られぬ希望があるなら、それを捨てる必要はありません。「こんなに祈ったのに」「こんなに尽くしたのに」「こんなに頑張ったのに」という経験があったとしても、それが未だ得られぬ希望を捨てる理由にはなりません。たとえ、800年の歳月がかかるとしても、それが未だ得られぬ希望を捨てる理由にはなりません。

自分が生きている間に希望が実現することはないかも知れない。自分の思い通りならず諦めるしかない、そんな現実を突きつけられるかも知れない。でも、歴史上には、まさにそういう絶望と無念の人生が数多く織り成された先に、でも、救い主がお生まれになったという預言の成就、救いの実現があったのです。「神様の御計画っていうのは、まあ、そんな感じだよね」と、どうにもこうにも、ままならないこの世界と自分の人生を委ねる信仰を、私たちは忘れないでいたいと思います。自分にはどうしようもできない、諦めるしかない、でも、神様は、その先をちゃんと考えて下さっている、大丈夫、絶対に救いはある、必ず救い主は現れる、という信仰を、アドベント初日の今日、

再確認したいと思います。最後にお祈りを致します。

神様。

今日、私たちは、精密に数えて何回目かは分かりませんが、およそ 2000 回目の第一アドベント礼拝をともに守っています。私たちにとって、4 週先のクリスマスを待ち望む礼拝は、2000 回にも及ぶ当たり前の習慣となっています。しかし、およそ 2000 年前にあった最初のクリスマスを、遙か 800 年も待ち続けた信仰者がいたという事実は、私たちにとって非常に励ましと反省を促すものです。私たちは、自らの寿命を遥かに超えて待ち続けた信仰者の姿を、躓きやすく、外れやすく、迷いやすい私たちの、良き道しるべとして、心にしっかりと留めて参りたいと思います。必ず救い主はお生まれになる、絶対に祈りと奉仕の業は報われると信じて、このアドベントの期間、あつく待望して過ごすことができますように。私たちの信仰の歩みを支え、導いてください。

このお祈りを我らの救いの御子、イエス・キリストの御名を通して、あなたの御前にお捧げ致します。

12 月誕生者の祝福祈禱

聖書：イザヤ書 46 章 3～4 節

あなたたちは生まれた時から負われ／胎を出た時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで／白髪になるまで、背負って行こう。わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。

祈祷：

神様。私たちは、主のお生まれを祝うこの 12 月にあなたによって尊い命を与えられ、生まれてきた誕生者の方々を憶えて祈りを合わせています。今、ここにお立ちになっている方々の人生を振り返れば、山あり谷ありの道を歩んで来られたらうと思います。その深みにある時も、また、その頂きにある時も、いつもあなたが隣にいて、支え導いてくださったのだと信じます。それぞれの誕生の日から始まる新しい 1 年間も、どうかあなたが傍にいて、その喜怒哀楽に寄り添い、時に応じた相応しい御業を示してください。あなたに連なる人生に、大きな喜びと幸いを、どうかお与えください。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。